

鉾山閉山による生活圏の変化
－岡山県旧柵原町を事例として－

齊藤雅史・宮本真二

鉾山閉山による生活圏の変化

－岡山県旧柵原町を事例として－

齊藤雅史・宮本真二

－論文要旨－

かつて東洋一の鉾山と言われた柵原鉾山と、その鉾山町に注目し、旧柵原町の鉾山閉山による生活圏の変化について検討した。

その結果、鉾山稼働時代に立地していた商店は、そのほとんどが閉店した。現在では、津山市をはじめとした、町外に生活圏が形成されて、公共交通機関は整備されているとはいえ、自家用車での移動が多く認められた。その一方で、高齢化が進展し、医療施設や理髪店は、町内での利用が確認された。したがって、鉾山閉山後の生活圏は、町外への進出が多いが、高齢化、公共交通機関の未整備といった、過疎地域問題の一端であることが示唆された。

キーワード：柵原鉾山、閉山、生活圏、高齢化、柵原町

1. はじめに

日本での鉱山は、明治時代から昭和の高度経済成長期ごろまで、全国各地で大規模に採掘が行われており、主な産出物としては、石炭、銅、鉄、亜鉛などである。採掘できる鉱物の枯渇や鉱山の合理化、化学技術の進歩など理由は様々であるが、そのほとんどが閉山に至った。鉱山事業の最盛期は、特徴的な建築物や近代的な社会インフラが整備されており、当時の鉱山町は都市の歓楽地的様相を呈していた（たとえば、岡田、1992）。

このような事象に着目した研究群として、鉱山と地域経済との関係を環境経済史的観点から検討し、鉱山依存型経済という特徴があることが指摘されている（岡田、1992）。

また、鉱山と地域経済の財政面に注目し、鉱山依存の伝統的な財政構造を転換させ、地域主体の開発を進めようとしてきたにもかかわらず、鉱山と一体化した関係は、今も残存していると指摘されている（秋葉、ほか、2011）。

さらに、鉱山労働法の変遷のなかで、鉱山労働者がどのような影響を受け、どのような労働環境のなかで労働生活を送ってきたのかを検証した奥貫（2013）などがある。

このように鉱山に関する研究は、鉱山と鉱山町との関係をあらゆる学問からアプローチし、鉱山町の繁栄を検証したものが多く、鉱山閉山後の生活状況について研究としたものは少ない。

岡山県、旧柵原町に存在した柵原鉱山は、農業に用いられる硫酸（硫酸アンモニウム）の原料となる硫化鉄鉱を採掘しており、食糧増産を政策として掲げていた当時の日本から見ると、柵原鉱山は重要な存在であった。したがって、全国から労働者が集まり、それに伴って商店数や人口も増加していった。そのため、当時はほとんどの生活に関する物事は、町内で済ませることができたと思われる。

以上のことをふまえ、本研究では柵原鉱山閉山後の人口と生活圏の変化に注目し、その特徴について明らかにすることを目的とする。

2. 地域概観

平成22（2010）年の国勢調査によると、美咲町は岡山県のほぼ中央に位置し、面積は232km²、人口は15,642人で、高齢化率は35.3%の中山間地域である。西部には旭川が、東部には吉井川が流れ、平坦地や丘陵部の山腹には、水田が棚田状に連なっている（図1）。美咲町は、中国山地からの内陸型気候と瀬戸内海からくる海洋型気

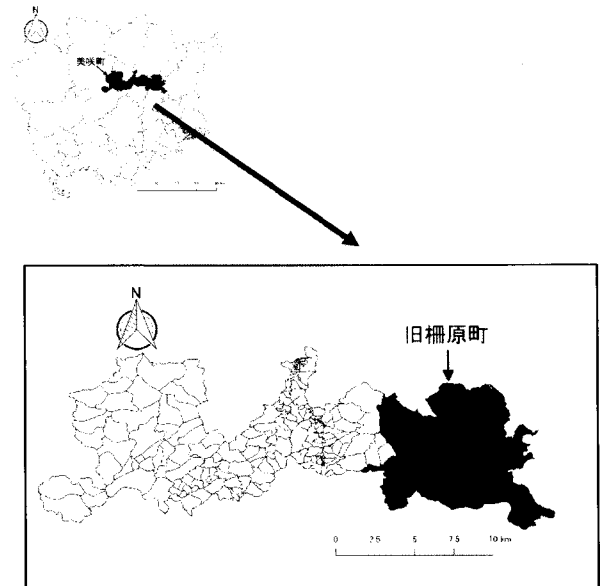


図1 美咲町旧柵原町の位置

候からなり、岡山市よりも平均気温は低く降水量は多くなっている。平成17（2005）年には久米郡中央町、旭町、柵原町の3町が合併し、美咲町が誕生した。

そのなかでも本研究の対象地域である柵原町は、平成22（2010）年の国勢調査によると、美咲町の東端に位置する旧町名で、面積は77.08km²、人口は5,934人で、高齢化率は36.9%と、美咲町全体の値よりも高い「中山間地域」である。柵原町は、川に沿って平坦部に水田が分布しているものの、大部分は急傾斜地域に棚田として点在している（柵原町史統編編集委員会、2005）。鉱山採掘時期は、鉱石を南部の港町まで運搬するために、鉄道が敷かれていた。しかし、平成3（1991）年の鉱山閉山により輸送の大部分を占めていた鉱石の運搬が行われなくなったため、閉山の跡を追うように鉄道も廃止された。そのため、現在では鉄道は通っていない。旧柵原町は、久米郡吉岡村、勝田郡飯岡村、北和気村、南和気村の4地区で構成されており、かつては全域が美作国に分類されていた。古くからこの4地区は密接な関係にあり、人的物的交流も盛んであった。昭和25（1950）年、税制改革により、鉱産税の委譲があり、配分をめぐって吉岡、南和気、飯岡村で会合が行われていたが、主張は異なり解決の見通しがなかった。その後、町村合併促進法が施行され、鉱山を中心とする関係4か村から合併の早期実現の声が関係住民に浸透し、昭和30（1955）年に柵原町が発足した（柵原町史統編編集委員会、1987）。

3. 方法

旧柵原町内でも鉱山の中心地とその周辺地域であった久木、藤原、柵原地域（図2）の世帯を対象に、以下の

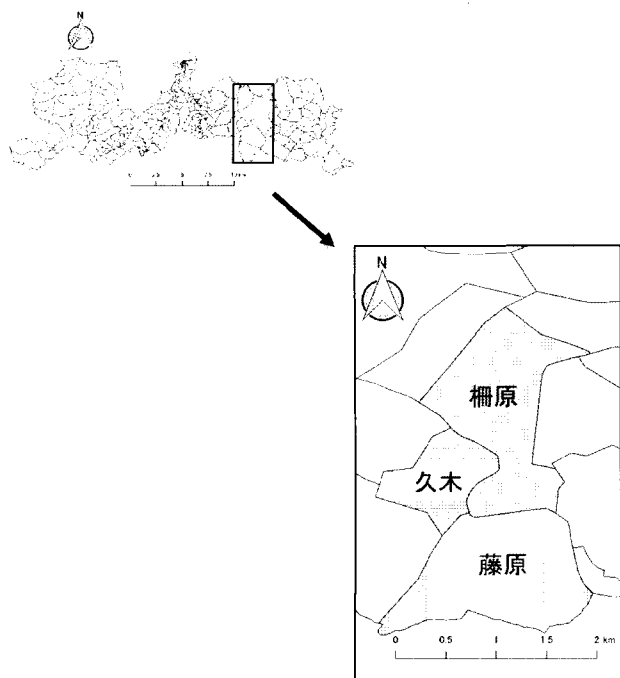


図2 アンケート対象地域

調査項目に関する無記名アンケート調査を平成28(2016)年10月4日～10月8日、10月17日～10月21日の期間で実施し、そこから得られた結果を地域ごとに集計した(表1)。

表1 アンケート回収結果

	世帯数	回答率	回収率
久木	137	30	21.9%
藤原	187	25	13.4%
柵原	47	19	40.4%
合計	371	74	19.9%

*世帯数：平成28(2016)年10月現在

調査項目

- ・回答者の属性
年齢、性別、居住地、職業、世帯構成、運転免許証
- ・生活圏について(多岐選択、重複回答あり)
日用品・食料品の買い物先、衣料品・趣味品の買い物先、理髪店・美容院の利用先、医療・福祉施設の利用先、地域名、移動手段
- ・公共交通機関について
充実度
- ・コミュニティバスについて
利用頻度

4. 結果

運転免許証の保有率は7～8割と高く、移動手段として自家用車を利用する人も全体の8～9割と高いことから、コミュニティバスや公共バスを利用する人は、ほとんど見られなかった。運転免許証を保有していない人でも、自家用車を利用するとの回答がいくつか見られたが、これは、住民との乗り合いなどで利用するという理由であった。

公共交通機関への充実度では、充実しているとの回答が2割、充実していないとの回答が8割であり、不満を抱いている方もおられた。コミュニティバスの利用頻度も、利用したことがないとの回答が9割を超えていた(表2・3)。

表2 公共交通機関への充実度

充実している	14.9%
充実していない	85.1%

表3 コミュニティバスの利用

利用したことがある	16.2%
利用したことがない	83.8%

(1) 生活圏の変化

ほぼすべての項目で津山市の利用が多く、次いで赤磐市(周匝)、美咲町・柵原地域での利用が見られることから、商圏は南北に伸びていた。理髪店・美容院は、美咲町・柵原地域での利用が6割と最も多く見られた。柵原地域での衣料品・趣味品の利用者は認められず、他市町村という回答が津山市に次いで多く見られた(図3～6)。

町内を走るバス路線は、津山市中心部、美咲町中心部など、北部行きのバスがほとんどであった。南部へ伸びる鉄道の廃止後に、代替輸送としてバスが通っていたが、平成23年に利用者の低迷で廃止され、現在では1本のバスで南方に移動することができなくなっており、乗り換えが必要となっている(図7)。

(2) 商店数と商店の変化

旧柵原町の商店数は、昭和初期の時点では50店舗ほどで日用雑貨が売られている程度であった。しかし、鉾山が稼働し始めると人口が増加し、それに伴い商店数も増加していった。旧柵原町の最盛期と呼ばれている昭和30年代頃には、スーパー、肉屋、電気屋、靴屋、洋服屋、文房具店、中国労働金庫柵原支店、農協久木支店、劇場やバーなどが立地していた。その後、鉾山の合理化や過疎化が進むにつれて商店数も減少していった。1976年に減少し増加しているが、これは町内による企業誘致のため

柵原地域	美咲町	津山市	赤磐市	美作市	久米南町	和気町	他市町村	県外	その他	無回答
0.0	1.3	60.0	12.5	6.3	0.0	1.3	13.8	1.3	1.3	2.5

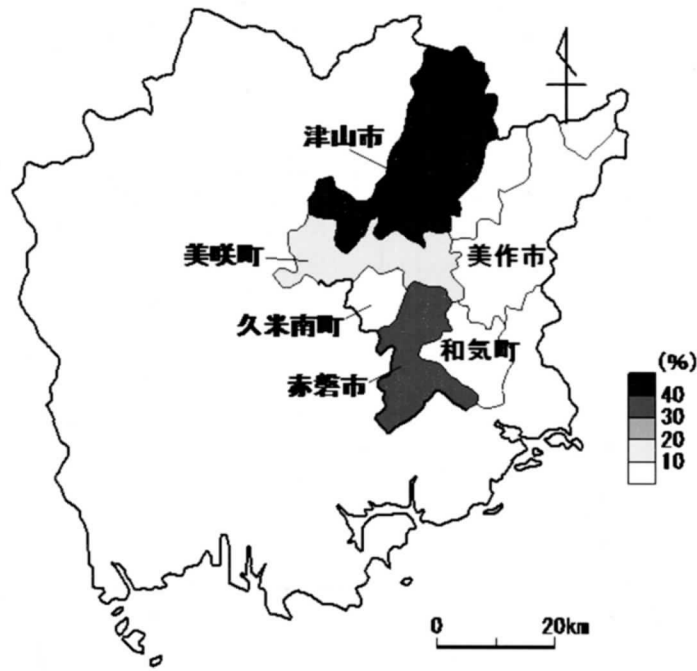


図3 日用品・食料品の買い物先 (%)

柵原地域	美咲町	津山市	赤磐市	美作市	久米南町	和気町	他市町村	県外	その他	無回答
7.4	6.2	43.2	34.6	4.9	0.0	0.0	1.2	0.0	2.5	0.0

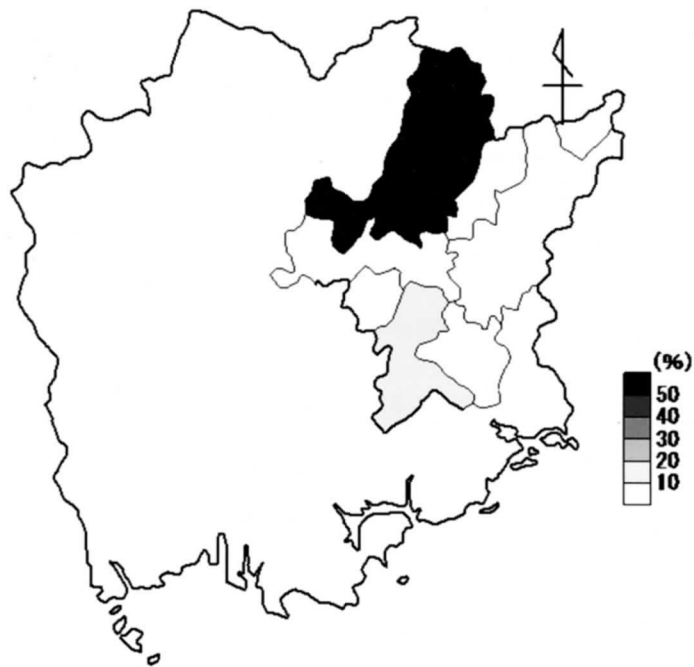


図4 衣料品・趣味品の買い物先 (%)

柵原地域	美咲町	津山市	赤磐市	美作市	久米南町	和気町	他市町村	県外	その他	無回答
46.2	15.4	24.4	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8	0.0	0.0	10.3

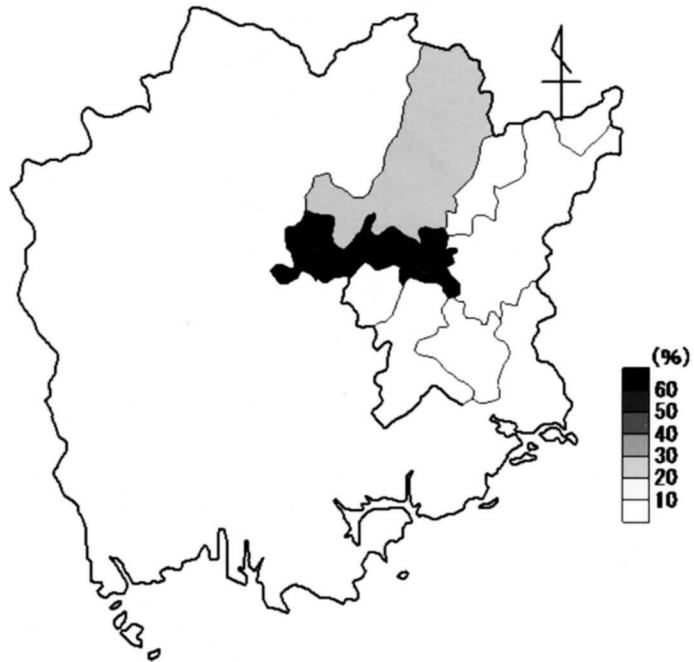


図5 理髪店・美容院の利用先 (%)

柵原地域	美咲町	津山市	赤磐市	美作市	久米南町	和気町	他市町村	県外	その他	無回答
23.7	3.9	51.3	11.8	1.3	0.0	1.3	5.3	1.3	0.0	0.0

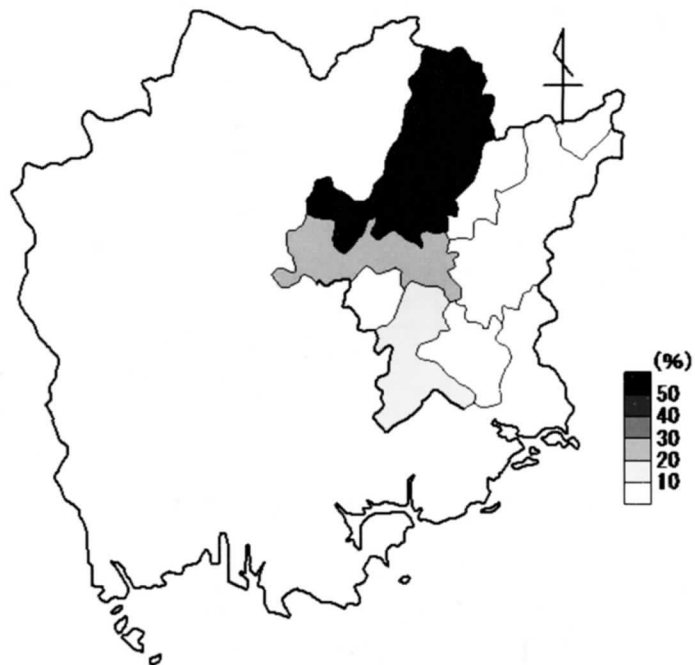


図6 医療・福祉施設の利用先 (%)

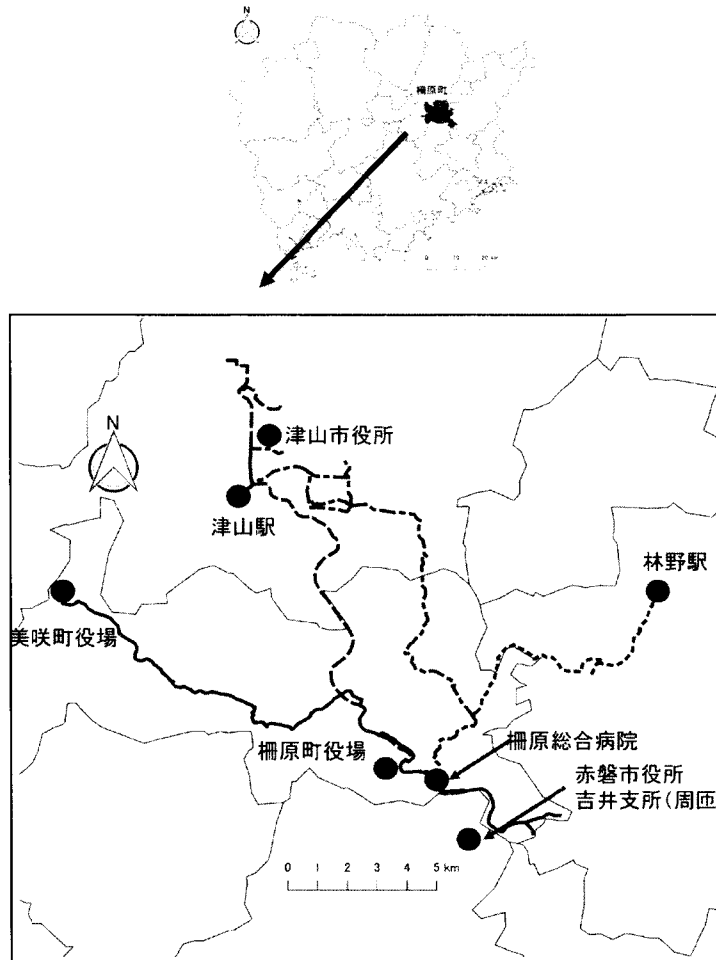


図7 旧柵原町内を走るバス路線

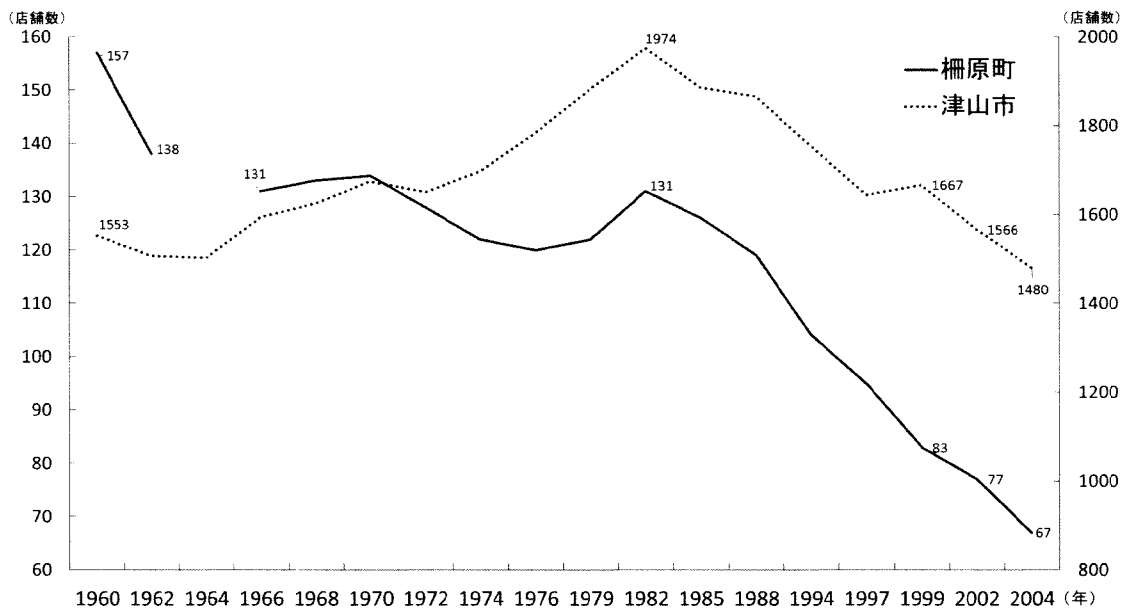


図8 旧柵原町, 津山市の商店数の変化 (飲食店を除く)

出典: 商業統計調査より *柵原町の1964年はデータ紛失

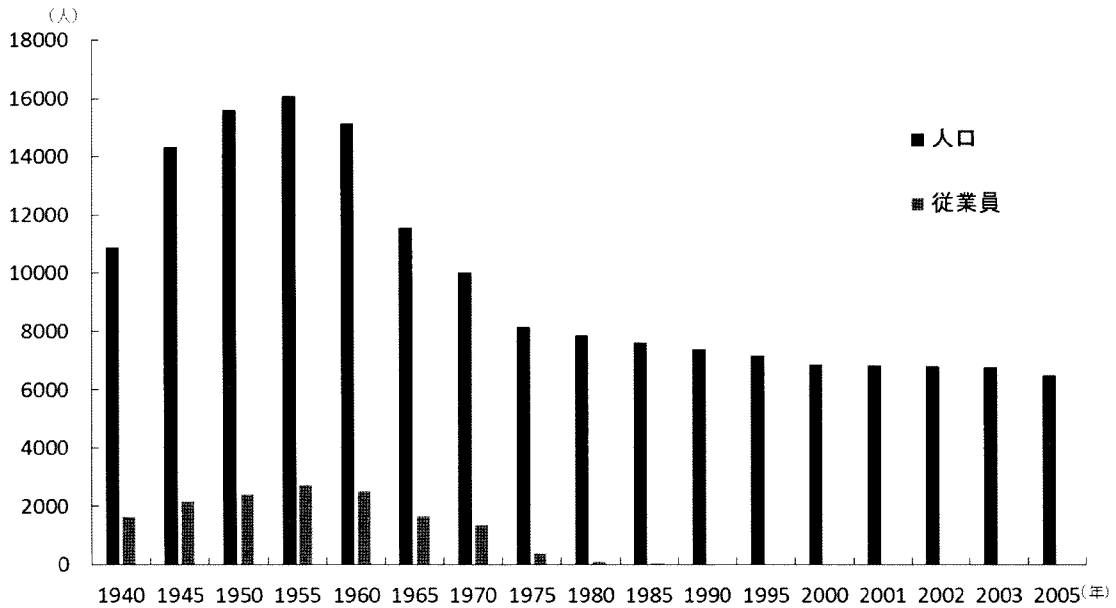


図9 柵原町の人口

出典：柵原鉱山資料館 *1990年以降の人口の出典は柵原町史統編より

めで、減少を食い止める要素とはならなかった(図8)。

さらに、人口(鉱山従業員も含む)と商店数の変化を比較すると、人口が減少の開始期の1960年頃、商店は1960年頃から減少を開始し、人口の減少を受けて商店も減少していることが明確となったが、両者の関係性は認められなかった(図9)。

5. 考察

鉱山繁栄期の柵原町は、町内での商圈が成立するというほどの結果から明らかとなった。

現在の旧柵原町の生活圏は、町内や赤磐市(周匝)にも見られるが、ほとんどが津山市に依存していることが明らかとなった。既存の柵原町全体を対象とした生活調査アンケートでも、ほぼ同じ結果が出ていた(久米郡地域合併協議会, 2004)。日用品・食料品の買い物先には赤磐市(周匝)が、津山市に次いで割合が多かったが、この赤磐市(周匝)は旧柵原町との町境に位置する場所で、柵原町役場からの距離も約7km(津山駅までが約18km)と利便性がよく、食品スーパー、ドラッグストア、ホームセンターなどが立地しているため、割合が多いのだと推測する。理髪店・美容院の利用先が柵原町内

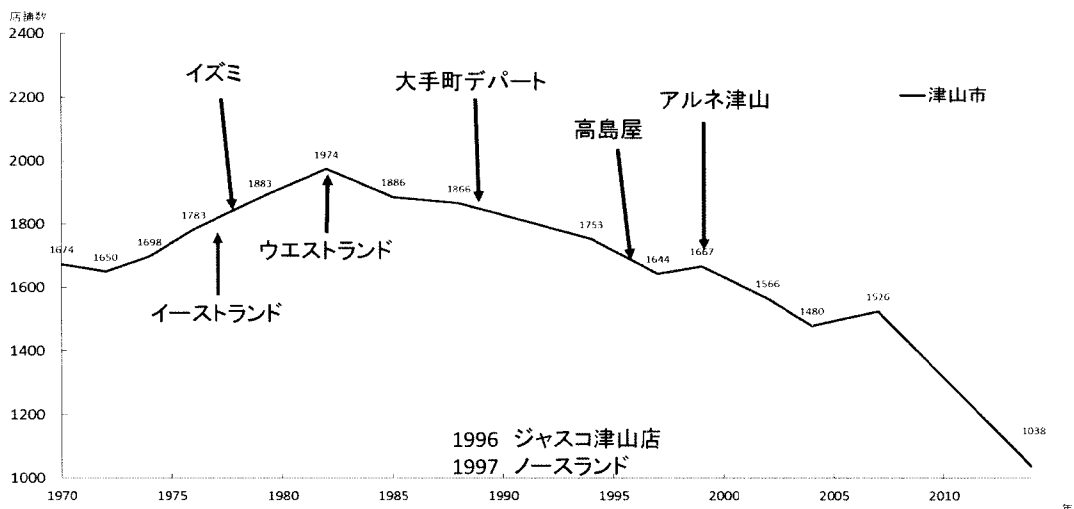


図10 津山市の商店数の変化と主な大型店舗の進出

出典 商業統計調査より *ニチイ、大手町デパートは1996年、高島屋は1999年に撤退

に多いのは、日常的な消費者行動は近隣で済ませるとい
う思考に起因するものと考えた。町内には医療・福祉の
利用先として、総合病院が立地しているが、津山市を利
用するとの回答が多く見られた。これは小児科や整骨院
などの小型の医療施設が、町内にほとんど立地してい
ないためであり、1人暮らしの高齢者、子供がいる家庭か
らの不満が多かった。

その他に、当該地域は、鉱山閉山後に津山市への依存
が明らかとなったことにより、津山市の商業環境も調査
した。その結果、津山市は、中心地に出雲街道が通り、
古くからの地方都市として栄え、中心市街地活性化法の
適用を全国でも早い時期に受けた地域で、大型店舗の進
出が早かった(図10)。しかし、モータリゼーションの
影響により、郊外型店舗の立地が優位になると、中心市
街地は衰退し、歩行者通行量が1999年には1980年の約3
分の1となった(山下, 2001)。そして、柵原町に続く
道路も整備されており、津山市中心部や郊外にも、自動
車で容易に移動ができるようになってきている。このことか
ら、津山市は2000年代に差し掛かる頃には、多くの大型
店舗が立地しており、周辺道路も整備されているため、
柵原町はもちろん、津山市に隣接する市町村の商圏環境
に編入されつつあることが推測される。

6. おわりに

旧柵原町の鉱山閉山による生活圏の変化について検討
した結果、以下の結論を得た。

①鉱山稼働時代に立地していた商店は、そのほとんどが
閉店した。そして、②閉山後、津山市をはじめとした、
町外に生活圏が形成されていることが判明した。その一
方で、③高齢化が進展し、医療施設や理髪店は、町内で
の利用が多く見られた。

[付記]

本研究は、第1著者の齊藤が平成28(2016)年度・岡
山理科大学・生物地球学部の卒業研究で実施した研究成
果の一部であり、その内容を第2著者の宮本が大幅に加
筆・修正した。

現地調査では美咲町役場柵原総合支所の支所長様、職

員の皆様、地域住民の皆様にご助言、ご協力をいただき
ました。

以上の皆様、さらに地理学研究室のゼミ生、地理・考
古学コースの関係各位にあつくお礼申し上げます。

なお、本研究の研究経費の一部として、科研費(課題
番号:25370929, 研究代表者:宮本真二), 同(課題番
号:25300048, 研究代表者:増田 研), 同(課題番号:
16H02717, 研究代表者:安藤和雄)の一部を使用した。

なお本研究の一部は、International Workshop on
Role of University in Promoting of GNH in Practice
and Sustainable Development(2017年3月10-11日:
Sherubtse College, Royal University of Bhutan)で第2
著者の宮本が口頭発表を行った。

文献

- 秋葉まり子・大石広人・高橋賢・千葉峻平・中川陽介・萩山翔伍・
松館怜(2011)小坂鉱山と地域経済-町の財政構造の変遷を通
して-, 弘前大学教育学部紀要, 105, 19-31
- 市南文一(2003)主要産業の動向からみた津山地域の性格, 岡山
大学環境理工学部研究報告, 8, 63-79.
- 岡田有功(1992)鉱山と地域経済第一次世界大戦前後の小坂鉱山
と小坂村を中心に, 早稲田商学, 354, 117-151.
- 奥貫妃文(2013)近現代日本の鉱山労働と労働法則-三重・紀州
鉱山の足跡-, 相模女子大学紀要C(社会系), 77, 107-121.
- 北川博史(2011)非大都市圏地域における地域システムの再編,
岡山大学文学部研究叢書, 32, 70-94.
- 久米郡地域合併協議会(2004)久米郡地域:新町建設計画-新し
い町作りのためのアンケート調査報告-, 久米郡地域合併協議
会.
- 柵原町史編纂委員会(1987)『柵原町史』, 柵原町.
- 柵原町史続編編集委員会(2005)『柵原町史 続編』, 柵原町.
- 山下博樹(2001)津山市における商業集積の動向と中心市街地活
性化, 鳥取大学教育地域科学部紀要, 地域研究, 3, 1-13.
- 【齊藤雅史:〒700-0005 岡山市北区理大町1-1
岡山理科大学 生物地球学部 生物地球学科】
- 【連絡著者:宮本真二 〒700-0005 岡山市北区理大町1-1
岡山理科大学 生物地球学部 生物地球学科
地理・考古学コース 地理学研究室
E-mail: miyamoto@big.ous.ac.jp】